

幼時の追憶

その二、一家離散

千叔母と祖父彦六

ロ、マ、國道が、髪の青白い分け目のやうに、
ヒースの野を真直に、白く
延びてゐる。さかしら人は
今、昔の日を對照し、
掘り、測り、比較する――

「大驚」を誇らかに掲げ、
ロ、マ、國道を歩むヘルメット姿の昔の軍團兵を
虚空に描きながら。

しかし、私には、背の高い真鍮のヘルメットを被つた
軍團兵は少しも浮んで來ない。眼の前にすぐ出て來る
のは母の御姿――

あの昔の街道、ロ、マ、國道を歩いた時
幼い私の手を引いて下さつた母の御姿。

曾 根 保

この詩はイギリス近代の詩聖まで稱せられたトマス・
ハーディの作である。その昔、シーザーはイギリスを支配
するに及んで、幾條かの軍用道路を造つた。これをロ、マ、
國道と呼んだが、今日その幾つかは現存してゐて、考古學
者や歴史家に研究の資料を提供してゐる。吾々も、東海道、
その他諸藩に作られた松並木の街道を通る時、參勤交代の
道中を想ひ浮べ、鎗振りや奴さんを描くのであるが、ハー
ディは、ロ、マ、國道を見て、恐らくは今亡き母を偲び、
幼時の追憶に耽つたのである。私にはかうした幼時は想ひ
出せない。多分、母は幼い私の手をさつて椽側なき歩かして
下さつたことであらうと思ふ。しかし、家には子供が
多く、手が不足してゐるためか、私なき殆んき子守の手で
幼時を過してゐるやうに思はれる。極微かな記憶である
が、子守の家へ行つたこと、その近くに村の鎮守の森があつ
り、お祭に暴れまはる牛鬼、の竹で編んだ大きな胸體があつ

たこご、小學校の上の小さなお宮の日當りのよい椽でよく遊んだこごなきが想ひ出される。町はくの字形の一筋町であるが、小學校はくの字の右側、中程に當るこころの一段ミ小高い丘の上にあつて、時間を告げる板木が町中に響いた。廣い校庭で、子守ミ遊んでゐるこ、袴をはいた二番目の兄が教室から出て来て、眞面目な顔をして板木を叩いてゐるのをよく見かけた。級長だつたのださうである。

小學校の庭の片隅のブランコは、幼い私、いや子守の遊び道具であつたであらう。石垣を一つ登るミ先程言つた小さいお社があつて、その右横から數丁上つた處に池があつた。煙硝庫の池ミ呼んでゐるたやうに思ふ。池の上手、即ち向ふ側に白い壁の火藥庫があつたからである。避雷針ミやらが光つてゐた。この池は今想ひ出しても魔の池さいふ感じのする池で、夢が池一面に繁茂してゐた。夢でみる恐しい池は、この池であつた。それでも夏になると、水口のあゝる土手の明るい側で子供達はよく泳いだ。一人で泳ぐミ、カッパが尻の穴を抜き取るミか言ふので怖がつて、皆が一緒でなければ行けなかつた。私は泳ぎに行つたこごはないが、この邊には女郎蜘蛛さいいつて喧嘩に強い蜘蛛が澤山にゐるので、兄達ミ取りに行つた覺えがある。派出な黄色ミ黒の縞のある大きい蜘蛛で、樹の枝にひつ掛けて取つて歸り、庭の樹に巢を張らせて置く。屈強な相手が見つかる

ミ、その巢の中に入れる。大抵は大きい方が小さい方を手速く繰で巻いてしまふ。それから血でも吸つてしまふのであらう、負けた蜘蛛の脚が空つぽになつて巢にひつかつて見える。この頃から他人の喧嘩なごに興味を持ち始めるのかも知れない。鬪鶏、さては南豫の名物鬪牛にもやがて興味を覺えて來るのである。

煙硝庫の池ミ關聯して、私はこゝに一番上の兄、廼兄に就いて語るこごにしよう。廼兄は當時、宇和島中學の上級生であつた。暑中休暇の一日であるらしい。既の前で、一尺四方の柱を約一間の長さに切り、それを大きな輕節みたいな形に削り始めた。傍につき切りの私は、何にするのかきいた。他の二人の兄も手傳つてゐる。何でも軍艦ミやらを造るさいふのである。ダンカンさいふものが何かさへ私には解らなかつた。さういふ點では田舎の子供は都會の子供に比べて智慧のつくのが極めて遅いやうである。

やがて輕節みたいなものは二階の物置部屋に運ばれた。二階は大きく三つの部分に分れて、真中二つが座敷で、この二つには疊の上に、平生は澁紙が廣々敷きつめられてあつた。こゝでお習字が毎日行はれたのである。前回言つた鐵山先生は老人で、眼が薄かつたので、主として大字を教へてゐられたやうである。祕藏弟子ミも言はれた二番目の兄は鐵俊さいふ號をつけてゐた。父の俊藏ミ師匠の鐵山

を組合せたものである。父は如山堂主人と號してゐた。

殘存してゐる父の手紙には殆んど全部、この號が記されてゐる。北側、即ち通りに面した座敷の床には武者人形が飾られたこまがあつた。菱餅をこしらへてゐる場面は今も想ひ出される。下手な切り手は正しい菱形にならず、屑ばかりこしらへて頭を搔いてゐた。東側の部屋はさういふ風になつてゐるたか想ひ出せない。お蠶を飼つてゐる頃、母の妹の千叔母さんが真夜中にこゝで劇樂自殺をしたさうである。何か深い事情があつたらしい。恐しい悲劇であるに違ひない。千叔母さんはまだ十臺の頃、遙々一人で東京に出て水原産婆學校に入り、その第一回生であつたさうである。その時の記念寫眞を私は今所有してゐる。母は處々方々を流浪した時も、父の位牌と一緒に千叔母さんの位牌を持つて歩いてゐられた。小さい桐の白木に「今泉千子之靈」こあつたやうに記憶する。悲劇の家は今日も陰慘な影に包まれてゐる。庄屋の高い石垣の下に、廣い葡萄棚の下に喘ぐ不吉な家、私は自分の生れたこの恐しい家を、よくボウの小説の中で讀むやうな氣がしてならない。

母は幸ゆきといつて、慶應四年生れである。母の父、今泉彦六は伊達侯の城下、宇和島の廣小路に住む漢學者であつた。百何十俵かの扶持を頂戴して、家老の次の次ついでいふ地位にあつたさうである。今も残つてゐる二棟の土藏を圍む廣大な

屋敷は昔の裕福を物語るに充分である。母の弟、道太郎は丸龜、徳島の稅務署長をしてゐたが、私が尋常五年の春、別子銅山の運輸課々長に轉じ、間もなく肺炎で急逝した。

祖父彦六はお江戸から土産に柱時計を宇和島に將來した人で有名ださうである。私の中學時代、當時健在であつた祖母はよく祖父の話をしてきかしてくれた。辻斬が流行つて友達ともだちの某がその本人だつたさか、祖父の若い頃には今日の時計とけいさいふものが無かつたから、お城に大きな火鉢があつて、灰で溝をギグザクに作り、溝の中に盛られた粉炭の火がその角まで來るさ一時間さか二時間さかで、その度に櫓の太鼓をたゞいて時を告げたなご、なか／＼面白い話が多かつた。私の中學時代にはまだお粗末な日時計が親類の家へ行くさ轉がつてゐて、子供のおもちやになつてゐた。祖父の若い時代には、學校——明倫館かもしれない——へ朝行くにも規則があつて、お城の太鼓が合圖で、それが鳴らなければ家を出てはいけなかつた。たゞし、溝のドブ板に片足がかゝつて居れば差支ないさいふので、大抵毎朝、片足をドブ板にかけて太鼓の鳴るのを待つてゐたさうである。

祖母はまた、種積陳重さんが歸郷された時なご、中學生の私に、あの人の家は足輕の身分であつたが、偉くなつたものだ。尤も足輕あしかさいふ名では呼んでゐるなかつたが、今泉家なごなごはまるで格が違つてゐたが、なごなご話してゐた。

昔の家來さいふのか、時々野菜物なごをさげて挨拶に来る人々があつたが、玄關で殆んぎ土下座をして、「御後室様、御後室様」を祖母を呼んでゐた。その時はかりは私も、落ちぶれたりさはいへ、祖母さんも昔は大したものだつたであらうさ想像したりした。祖母は母の厚い孝養に八十幾歳まで生きてゐた。ひざい喘息もちで、やめればいゝのに、ゴホンゴホンいひながら、それでも煙管を放さなかつた。

兄の軍艦と無錢旅行

さて、千叔母さんの亡靈の出さうな部屋から、西側の部屋へ移る。こゝは板の間で、姉兄の造船所である。例の鏝節のやうな型にブリキを被せるのである。ヒチリンで鏝を焼いて、臭い薬にチュツミ入れたかと思ふさ手速く臆を掬つて、銀色の一滴をブリキの合せ目に落してなすりつける。同じこゝを毎日繰返し繰返して、やつと胴體が出来た。それに蒸氣機關を据え附ける。デッキを張る。キャビンが出来る。煙突が二本出る。マストを立てる。細かい仕事が多また幾日も続く。ペンキで塗る。萬國旗が張り渡される。愈々完成したのである。艦名は何であつたか、今想ひ出せない。「やまご」か「やしま」であつたやうな気がする。本物の軍艦なら進水式があつて、艦装があるのが順序であらう。しかし、兄の軍艦は逆に行つて、愈々進水式さいふ日になつた。この日、天氣清朗で、有象無象は煙硝庫の池に

先を競つて駈つて行つた。私も勿論その中の一人である。土手に着くミ、アルコール・ランプは點せられた。蒸氣が出る。スクルーが廻轉する。兄は得意顔で菱を掻き分けて池の中に降りて行つた。平衡を保つために重い重りが更に加へられた。ところが、不幸にして兄は足を迂らして軍艦もろさも池の中でひっくり返つてしまつた。無念や、一ヶ月以上の辛苦の結果は文字通り水泡に歸してしまつた。試験第一日はかくして失敗した。私はこの日の失望を今でもはつきり覚えてゐる。後にこれは完成して、宇和島へ荷物として送られ、さる縁ある家に保存されてゐた。私の姉兄に就いての想出はこの軍艦から始まつてゐる。發明好きさいふか、氣違ひさいふか、兄はその頃「電氣之友」さいふむづかしい雑誌を愛讀してゐた。その後多くの發明品を造つて、實用新案や專賣特許權さへも獲得した。高橋是清さいふ名前を兄や母の話に聞いたのはその頃である。高橋さんが特許局長であつたのである。兄は二十臺で天折したが、私には色々な影響を與へてゐる。こゝにはその中の一つだけ附け加へて置かう。

姉兄の中學四年生の頃のこゝであらう。當時學生の間に行はれたこゝで四國一周無錢旅行さいふのがある。勿論夏休みを利用してのこゝである。私も企てたこゝがあつたが途中で引返した。兄は一周した。四國には弘法大師のお開

きになつた四國八十八箇所があるので、年中、特に夏分はおへんぎさんが同行二人の笠をいたゞき、白装束で村から村へ巡禮の旅を續けてゐる。しかも四國の人は情け心が格別で、決して巡禮を冷遇しない。私なきも幼い頃、大洲にゐて、丁度巡禮の道筋に當るころから、「巡禮に御法捨」さいふ聲をきくき、お米をお椀に一杯盛つて施したものである。チリ紙、草鞋の類も施したことがある。學生の無錢旅行も、その邊から考へ出されたものかもしれない。兄は四國を殆んぎ一周して、もう一息で宇和島さいふころ、即ち宿毛まで歸つて來た。ころが、その町外れを力なく歩いてゐるさいふ一人の道連れが出來た。もう夕方であつた。色々話をしてゐるうちに連れの人は、兄が今宵の宿泊料に困つてゐることを知つた。そして當時としては相當の大金である金五圓也を恵んでくれた。兄は勿論住所姓名を告げ歸つてから返金するから、お名前を、さいふしたのであるが、連れの人は、いや心配はいらぬ、自分は高知市の齒醫者だが、またそちらへでも來たら寄つてくれ給へ。答へるばかりであつた。兄は歸宅するや母に一切を語つた。しかし「高知市の齒醫者」だけでは、手紙の出しやうもなく、何れ何さかなるだらうと言ふばかりでそのまゝになつてしまつた。月日は又移つて、私が無錢旅行をする年齢に達した時、母は右の話をして、奇特な齒醫者さんを是非探して來

るようにこのころであつた。ころが、母の懇意な婦人傳道師が宇和島美似基督教會から高知へ轉任になるさいふので、この人に依頼したころ、十五六年前の、その恩人はなほ健在であるさいふ報告に接した。母の喜びは大變なものであつた。然るべく、禮をつくし謝意を表したのは言ふまでもない。私の無錢旅行にもこれに似寄つたころがある。私のは無暴な旅行で、半途で挫折したが、下駄で石槌山を登つた痛快さは忘れられない。世の中は交通が便利になつて、人々が互に近く住むやうになつたが、それに反比例して人情は紙の如く薄れてゆくやうな氣がする。もう今日では、無錢旅行なきさいふものは昔語りに過ぎなくなつてしまつた。

三番目の兄——「黙り者の事おこし」

父の歿後、三番目の兄は宇和島の中學にゐる廼兄の下宿に引取られて行つた。さういふ譯で行つたのか、はつきり分らないが、この頃母方の一家がまだ宇和島に住んでゐるから、そこを頼りに送つたのかもしれない。或は又、廼兄が病身だつたから、手傳の意味であつたかもしれない。やうやく一家離散の情況である。私は四男で、弟が一人ある。つまり、私の兄弟は男五人で、女は一人も無い。弟は二つの年に叔父の家に貰はれて行つた。三番目の鼎兄は無口で、よくめそめそ泣いたりするので女みたいだなき叱られて

ゐた。亂暴者の私にはいゝ相手で、私の喧嘩の相手はこの兄にきまつてゐた。弟であるさいふのミ、口が兄より達者だつたのミで、私の方がいつも得をしてゐた。母も或る人に、保はいけずで、我儘ですが、さういふものか、それだけ鼎よりも可愛いゝやうですなゝ話してゐたさうである。最も兄弟の中で、私だけが一番長く母の膝下にゐたさいふのミが關係してゐるのであらう。長くるたさいいつても、二十歳、三十歳になるまで、母親と一緒に暮せるやうな幸福な人に較べるミ、小學校を卒業しないうちに既に母の手から離れ離れになつてしまつた私達兄弟は、實際慘めな星の下に生を享けたものである。

鼎兄は柔和で評判がよかつた。ミころが、宇和島へ行つて暫くしてのミ、廼兄から、鼎はそちらへ歸つて居らぬか、さいふ電報が來た。家中大騒動で、電話が方々へ飛んだ。話の様子では、兄の藥取りに行つて、歸りが遅かつたためひきく叱られたのが原因で、姿を晦したのである。自殺をしたかもしれないさいふので水上警察にも依頼した。また、獵師の網に死人がかゝつた、鼎かもしれない、なごの噂も傳はつた。本來が氣の小さい子供だから、その心配も多分にあつたらしい。母の實家は、その少し前に丸龜に轉任してゐたので、そこへも電報を打つた。小學生が一人でそんな遠方へ行ける筈もなし、また乗船する時に怪まれ

ない筈もないので、誰一人して丸龜まで行つたミ思つた者はなかつた。ミころが、數日後、來てゐる、安心せよさいふ電報なのである。實は、丸龜の公園の橋の上で、夜しくしく泣いてゐる男の子がある。或る旅館の主人が、きいてみるミ「稅務署に勤めてゐる今泉さいふだけが判つたので叔父の家へ連れて來てくれたのださうである。番地も知らずに飛び出したものだから、晝のうちはそれでも町を歩いて自分の目的さへ忘れてゐるが、夜になるミ急に心細さを感じて、たゞ泣きに泣いたのであらう。見つかる迄の家中の者の心痛は想像に餘りある。爾後、私の家では「黙り者の事起し」ミ言へば鼎兄のミを指すミになつてしまつた。今は山梨高等工業學校に勤めて極めて暢氣に暮してゐるらしい。

實はれて行く

父が亡くなつてミの位經つたのであらうか。一周忌だつたかもしれない。親類の人が幾人も來て、何か大事なミを相談してゐるらしかつた。私はお八重ばあさん——私はこの人ミ吾々ミの因戚關係に就いてははつきり知らないが——の脊中に負はれて、家の前に繫いである馬の長い鼻を撫でゝゐた。おばあさんは何か哀れつばいミを馬に話してゐる。馬ミの別れらしい。一心多助なら、「おい、青よ、さいふミころであらう。私は馬のあの優しい眼を覺えてゐる

るやうな氣がする。後年、一年志願兵として騎兵第五聯隊（廣島）に入營し、一年有半を馬と共に暮したが、その間も、父の愛馬の長い顔は忘れてゐなかつた。この馬は後に一度再會する機を得たが、彼果して私を識つてゐたかどうか。その時はもう、乗馬でなく駄馬に下落してゐた。父に可愛がられた頃の彼は聰明で、往診から歸つて、表で鞍を取つてやるまで、ずつと邸を廻つて裏の自分の厩にはいつて寢てゐたさうである。一度だけ、裏の畑へ無斷で出て行つて豆を食べてゐたさうである。馬物語はいづれ日を更めて執筆させていたゞくこゝにしよう。

その日の午後のことである。奥の間で食事をしてゐた大洲の叔父が川へ魚釣りに行くから皆と一緒に往かうといふので、私は母に着物を着かへさせて貰つた。魚釣りは面白からうなぞ、話しながら帯を結んで下さつた母は心の中で泣いてゐられたことと思ふ。今度は二番目のお兄が私をおんぶしてくれた。いつになく皆が優しくしてくれるのが感じられる。町から川まで十數丁、母もおばあさんも一緒だつた。一艘の小舟が吾々を待つてゐる。二人の船頭の外に大洲の叔父と兄と私と三人だけが乗船した。私は母も乗れ、おばあさんも乗れさせがんだが、皆は陸から行くから先へ行つて待つてゐてくれと言ふ。もつと川下に釣竿も用意してあると言ふ。私は本當だと思つて納得した。さよう

なら、さようならば舟と陸とに交はされた。（あゝ、母上よ、あなたの愛兒は幼くしてまた一人、あなたを離れて行く、その時の御氣持を今想つて胸が迫つて來ます。後年今治の港でお別れした時、私はあなたの眼に涙が光つて、顔をそむけられたのを想ひ出します。あなたは多くの子故に幾度お泣きになつたことせう。）

舟は岸を離れた。離れるが早い、流に乗つた小舟は矢の様に飛ぶ。もう母の姿も見えない。私はこの楽しい舟遊びに嬉しくてたまらず、變化極り無い兩岸の光景に氣をこられて、魚釣りなどはもう忘れてしまつてゐた。

夕方舟は目的地に着いた。たうさう釣竿をもつた人は來なかつた。先年私は子供を連れて、この舟の着いたところへわざ／＼立寄つて寫眞をさつたりした。感慨無量であつた。子供は不思議さうに私のすることを見てゐた。こゝは又私が初めて泳ぎを習つたところでもある。女高師のプールでやつと十米泳ぎ出したばかりの子供に、私の泳ぎ初めの秘傳を披露してやつた。

前回大洲の町の名をあげたが、こゝはもろ加藤氏の居城で、中江藤樹先生の仕官された町として有名である。町の西のはづれに柚ノ木といふ字がある。舟を上つて私達三人はこの柚ノ木の高井兵三といふ標札のかゝつた家にはいつた。この叔父は姓の如く背の高い人で、立派な人であつた。

人格者として町の人から尊敬されてゐた。母、妻との三人暮しで子供が無かつたから、私を養子にするつもりで、連れて歸られたのである。今は實子の勤め先、伊豫の三島にゐられるが、齡八十を越して尙御元氣なのは喜ばしい。前回一寸書いた風呂の中の小僧はこの實子である。

高井の祖母と母——かう呼ぶことになつたが、——に可愛がられて、家に残した自分の母を忘れる位に、着いたその晩から親んだ。最も兄が數日一緒にゐてくれたので氣も紛れてゐたのであらう。その時私が七つださするさ兄はまだ十三、四の少年に過ぎない筈である。貰はれて來た弟に、されだけ同情したかは知るよしもないが、數日後に、弟を寝てゐるうちに置き去りにして、五里のさびしい路を取つてかへす兄が「兄ちゃん」その後から呼ぶ弟の聲をきいて幾度か立止りはしなかつたであらうか。十三、四の少年にそんな仕事をさせた母もさぞ辛かつたことであらう。弟を新しい父と母の手に托して、一家の窮乏を救ふさいふ大任を果して、母に仔細を報告をした時、少年の瞳は誇らかに輝いたかも知れないが、それを聞いた母の眼は涙で曇つたことであらう。その後も尙ほ不安の幾夜が続いたことであらう。身の細る思をしたのは二宮金次郎の母だけではないのである。

柚ノ木に來て二日か三日目のことである。兄は私に字を

書かせるといつて手本を書いてくれた。「花開天下春」を草書で書いたもので、私は今もその書體をはつきり記憶してゐる。半紙を縦に三枚ついで位の大きさの紙であつたやうに思ふ。何枚か稽古をした後に、やつと淨書が出来た。私は小さい右の掌に朱肉を塗つて落款の代りに押した。出來が良かったさうである。長い間、佛壇の横に張りつけてあつた。これが私が筆を執つて字を書いた最初である。この些細な一事が、後年私に書道を志させた一つの動機となつたのを思ふと、その他大小の事件をも考へ合せて、人間、いかさまへ思ふのである。

習字をした翌朝、私は目を覺して隣に寝てゐた筈の兄がゐないのに氣つき、家中を探し求めた。便所の中までのぞいてみた。聲をあげて泣いた。叔父も叔母も一生懸命に私をやくりしてくれた。しまひには叔母の胸に抱かれて泣きぢである。この兄も糖尿病から腎臟病を起して、昨年暮に、他界してしまつた。まだ五十にもならないのに、惜しいことをした。五人の子供を残して行くのはさぞ苦しかつたであらう。いつの世にも同じ悲惨なことが繰返し繰返し起つてゐる、あちらにも、こちらにも……

(つづく)